

2014 年法科大学院全国統一適性試験 実施報告書

適性試験管理委員会

法 科 大 学 院 協 会
公益財団法人 日弁連法務研究財団
公益社団法人 商事法務研究会

目次

1. 法科大学院全国統一適性試験が測定する能力の構造.....	3
1.1 法科大学院全国統一適性試験における適性に対する考え方.....	3
1.2 各セクションのねらい(測定目標).....	5
2. 法科大学院全国統一適性試験の構成(2014年).....	6
3. 実施結果.....	7
3.1 受験者について.....	7
3.2 スコア(総合得点)の分布.....	8
3.3 属性別スコア(総合得点)の分布.....	10
3.4 等化について.....	11
4. 合計正答数の分布と信頼性.....	12
4.1 第1回試験の結果.....	12
4.2 第2回試験の結果.....	13
5. セクション別の結果.....	14
5.1 第1回試験の結果.....	14
5.1.1 セクション別の正答数分布.....	14
5.1.2 セクション別の通過率と項目識別力.....	14
5.2 第2回試験の結果.....	15
5.2.1 セクション別の正答数分布.....	15
5.2.2 セクション別の通過率と項目識別力.....	15
6. セクション間の相関関係.....	16
7. 第4部「表現力を測る問題」について.....	16

適性試験管理委員会委員名簿 (五十音順・2014年10月現在)

委員長	鎌田 薫	早稲田大学総長(法科大学院協会理事長)
副委員長	太田 勝造	東京大学大学院法学政治学研究科教授
	足立 芳寛	東京工科大学客員教授
	大貫 裕之	中央大学法科大学院教授(法科大学院協会専務理事)
	菅原 郁夫	早稲田大学大学院法務研究科教授
	須藤 正彦	元最高裁判所判事(弁護士)
	但木 敬一	元検事総長(弁護士)
	西村 和雄	京都大学経済研究所特任教授・京都大学名誉教授
	松澤 三男	(公社)商事法務研究会代表理事専務理事
	馬橋 隆紀	(公財)日弁連法務研究財団常務理事(弁護士)
	毛利 透	京都大学大学院法学研究科教授(法科大学院協会入学者選抜・適性試験等検討委員会主任)
事務局長	山本 昌平	(公財)日弁連法務研究財団常務理事(弁護士)

1. 法科大学院全国統一適性試験が測定する能力の構造

1.1 法科大学院全国統一適性試験における適性に対する考え方

■適性の能力構造

法科大学院入学以前の段階で問われるべき適性とは、法律の知識を備えているか否かではなく法曹をめざす者として必須の資質・能力は何か、という観点で考えられるべきである。言い換えると、適性試験において測るべきものは、法科大学院におけるリーガル・トレーニングに耐えうるだけの資質・能力を備えているか、履修の前提として要求される判断力、思考力、分析力、表現力等の能力を備えているか、ということになる。

公益財団法人日弁連法務研究財団(以下「財団」という)では、LSAT の実施機関である米国 LSAC との研究交流等を含めて 2000 年より約 2 年半にわたり日本版 LSAT に関する調査研究を進めた。その結果、図 1 に示す 4 つの側面についての能力を適性試験で測定することが適切であるとの結論に達した。適性試験管理委員会では、この財団見解を採用し、試験を設計している。

この概念図は、4 つの能力は相互に重なり合う部分がある一方で、それぞれの能力に独自の成分も含んでおり、4 つの能力が総体として「リーガル・トレーニングに耐えうるだけの資質・能力」を構成している状態を視覚的に表現している。これらの能力は実務法曹に求められる人間像、いわば「法曹としての適性」全体を空間で表現した場合の中核的な部分をとらえてはいる。しかしながら、これらの能力が法曹の適性のすべてであるとはいえない点にも留意していただきたい。よい法曹としての適性にはこれらの 4 側面の能力以外にも、たとえば忍耐力、知的好奇心、リーダーシップ、人の話を共感的に聞く能力、誠実さ、法曹倫理等、いくつもの知的・人格的側面が考えられる。「適性空間」がいくつの成分・側面から成立しているかについての完全な合意を見出すことは難しいが、中核的な能力としての 4 つの側面の必要性については、法曹を含む多方面の専門家の同意するところと考えられる。

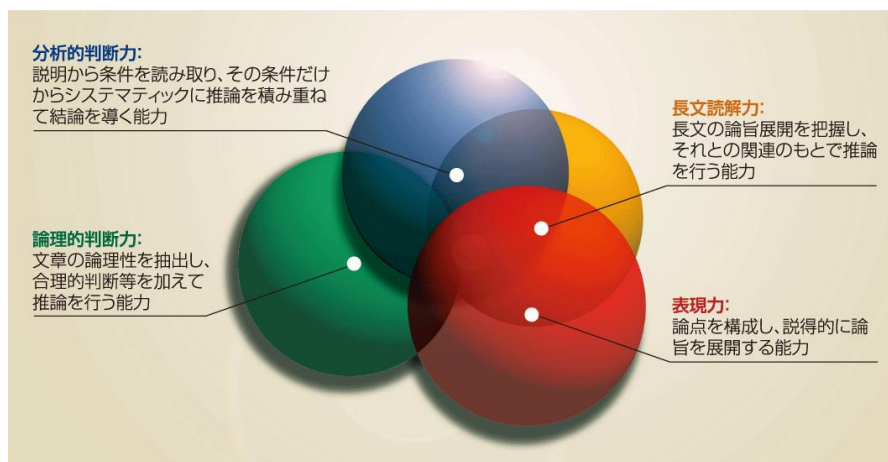


図 1 適性試験で測定する能力構造についての概念図

■ 4つの能力に関する試験方式

受験者の適性を的確に評価し、かつ公平な入学者選抜を実現するためには客観的な試験方式を採用することが望ましいが、新しい司法制度の充実に向けて多様な能力をもつ入学者を確保することへの配慮も必要である。こうした点も考慮し、論理的判断力、分析的判断力、長文読解力については客観式の試験を、客観式の測定・評価にはなじみにくい表現力については、論述式の試験を課すことが適切である、という結論が財団による調査研究から導かれた。

こうした3セクションの客観式問題と1セクションの論述式問題という適性試験の構成は、米国LSATを比較的忠実に模したものになっているが(図2参照)、それぞれのセクションのねらい(測定目標)は、調査研究を踏まえて適性試験管理委員会が独自の検討を加えて設定したものである。各セクションのねらいについては後述する。

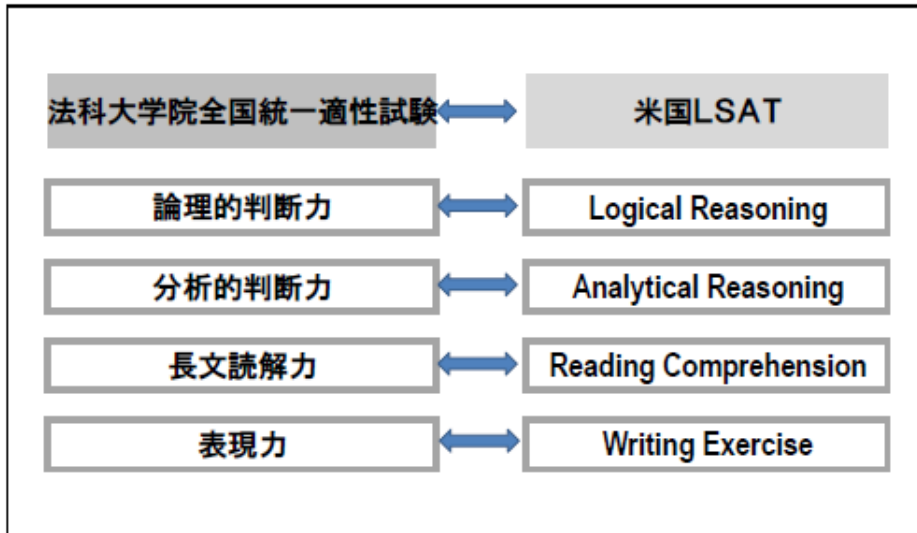


図2 適性試験の構成要素の対応図

1.2 各セクションのねらい（測定目標）

■論理的判断力を測る問題の特徴

論理的判断力を測る問題は、与えられた文章に含まれる論理構造を認識し、論理的な推論を行って、正しい結論を導く能力を測定することを目標としている。裁判や調停や法律相談等の実務においては、短時間のうちに事案を正確に把握し、問題点を正しく認識し、論証を組み立てていくことが必要になるため、法曹には高い論理的思考能力が必須である。この能力は単なる形式論理の能力だけではなく、文章から論理構造を読み取って合理的な推論を行う能力や、データを解釈して正確な情報を抽出する能力も必要とされる。そのため、問題はさまざまな分野から題材をとり、多様なタイプの設問を用意して、論理的判断力を測定しようとしている。知識の量を問うものではないので、最小限の常識的知識は必要とするが、それ以外の予備知識や専門知識の有無により不公平が生じないように配慮している。

■分析的判断力を測る問題の特徴

分析的判断力を測る問題は、与えられた条件から結論を導く能力の基礎を測定することを目標としている。日常的な判断は、常識や直感に流されることが多いが、法律の厳密な解釈では、先入観を排除して純粹に前提から結論を導く能力が必要となる。また、真実の解明では、証拠から確実に導かれる事実を見つける能力が必要となる。このように、法曹としての活動のひとつの土台となるのは、与えられた条件から必ず成り立つ事実を正確に導く能力である。分析的判断力を測る問題は、この能力の中から常識や直感的判断を除いた基礎的な推論能力を測定するためのものである。

■長文読解力を測る問題の特徴

長文読解力を測る問題は、法曹として必要とされる文章読解能力の有無を測定することを目標としている。すなわち、法曹は、判決文、準備書面、論文、主張、見解等、多くは長くかつ難解な文章に日常的に接し、短時間でそれらの論理構造や論旨を的確に把握することを要求される。長文読解力を測る問題は、その際に必要とされる論旨の把握・抽出能力、論理構造の把握能力、推論・論理の組み立て能力等を試すものである。また、幅広い分野の知識の理解・吸収能力を問うべく、問題に用いられる素材としての「長文」は法律関係の文章とは限らず、広く種々のジャンルにわたる文章が用いられる。全体として、一般的な国語能力を測るのではなく、法曹に要求される、より高度な読解能力を測定しようとするものとなっている。

■表現力を測る問題の特徴

表現力を測る問題はいわゆる小論文と出題形式を同じくしているが、法科大学院全国統一適性試験の理念に従い、出題のねらいは通常の小論文とは異なる。まず法律学の知識を問うものではないことが前提である。また多様性・開放性の理念のもと、受験者の専門にかかわらず公平に評価することが可能な内容が求められる。次に法曹としての適性、法曹となるための素養・スキルを測るという目的がある。事前の知識をはき出すのではなく事実関係やデータ等の題材を提示し、それを使いながら一定の主張を説得力ある文章として展開することを求める。日本語としての作文能力や論理的な構成能力等は当然の前提として要求されるが、そのうえで自己の主張を組み立てて、いかに説得的に提示することができるか、という能力を測るものとなっている。

2. 法科大学院全国統一適性試験の構成(2014年)

■各セクションの問題構成

法科大学院全国統一適性試験は4つのセクションで構成される試験であり、各セクションは次の構成になっている。第1部から第3部は多肢選択の客観式試験、第4部はいわゆる論述式試験である。第1部から第3部の正解は、試験実施後すみやかにウェブサイト上で公開した。

- 《第1部》論理的判断力を測る問題(24項目)/40分
問題1～問題24。1問1項目。
- 《第2部》分析的判断力を測る問題(24項目)/40分
問題1～問題4。1問6項目。
- 《第3部》長文読解力を測る問題(24項目)/40分
問題1～問題4。1問6項目。
- 《第4部》表現力を測る問題(1項目)/40分

■成績の通知

成績通知書

2011年法科大学院全国統一適性試験
成績通知書

フリガナ	フキセイ タロウ	
氏名	適性 太郎	2011年5月29日・6月12日実施 「法科大学院全国統一適性試験」における 貴殿の成績を通知いたします。
5月29日受験番号	011L-0012	2011年7月11日 適性試験管理委員会 委員長 鎌田 薫
6月12日受験番号	511L-0008	

試験成績			
実施日	正答数	順位(受験者 7,023名中)	平均正答数
5月29日実施			
第1部:論理的判断力を測る問題	12/24	4,052	13.5/24
第2部:分析的判断力を測る問題	14/24	3,831	14.8/24
第3部:長文読解力を測る問題	18/24	3,012	15.1/24
合計	44/72	3,986	42.9/72
総スコア(総合得点)①	188		
6月12日実施			
第1部:論理的判断力を測る問題	14/24	2,722	13.2/24
第2部:分析的判断力を測る問題	15/24	2,809	15.0/24
第3部:長文読解力を測る問題	16/24	2,057	13.5/24
合計	45/72	2,118	41.7/72
総スコア(総合得点)②	192		

※スコア(総合得点)＝等化手続を経た得点
このスコア(総合得点)①②のうち高いスコアを、法科大学院提出用の成績カードに表示している。

なお、全受験者のスコア(総合得点)分布等は、(公財)日弁連法務研究財団のホームページで公表しています。
<http://www.jlfor.jp/>

(お問い合わせ先)
適性試験管理委員会事務局
〒103-0025
東京都中央区日本橋茅場町3-9-10
TEL 03-5614-6286
FAX 03-5643-7186

成績証明カード(表紙)

2011年法科大学院全国統一適性試験成績証明カード
(5月29日実施試験 受験番号) 511L-0008
フリガナ タロウ
氏名 適性 太郎

本カードは開封すると無効になりますので、法科大学院に出願書類として提出される場合には、開封せずに外側の点線で3つに切り分けて、密封されたままの状態でご提出ください。(1枚のカードの大きさ:横120mm×縦76mm)。(内側の線では開封しないでください)

適性試験管理委員会

成績証明カード(内側)

2011年 法科大学院全国統一適性試験成績証明カード
(6月12日実施試験 受験番号) 511L-0008
フリガナ タロウ
氏名 適性 太郎

正答数	第1部	第2部	第3部	合計
	14/24	15/24	16/24	45/72

スコア(総合得点): 192
※ 等化手続を経た得点 適性試験管理委員会

3. 実施結果

3.1 受験者について

2014年の第1回法科大学院全国統一適性試験は2014年5月25日(日)に、第2回法科大学院全国統一適性試験は6月8日(日)にそれぞれ全国17地区で実施された。志願者数と受験者数は表1のとおりである。図3～5、表2の各資料は入学有資格受験者3,994名をベースとしている。

表1 志願者数・受験者数

受験回	志願者	受験者	入学有資格受験者
第1回	3,599	3,338	3,278
第2回	4,068	3,642	3,578
第1回のみ(a)	343	449	416
第2回のみ(b)	811	753	716
第1回・第2回の両回受験(c)	3,253	2,889	2,862
実人数(=a+b+c)	4,407	4,091	3,994

※1 入学有資格受験者=大学以上卒業(学士号以上取得)、大学卒業(学士号取得)見込み、飛び入学(大学3年生以上在学)、その他の法科大学院受験資格を有する者。

※2 等化には、第1回および第2回の両方を受験した者のうち入学資格を有する者(2,862名)を用いている。

※3 両回志願者でいずれかの回を受験しなかった者がいるので、志願者数より受験者数が多い場合がある。

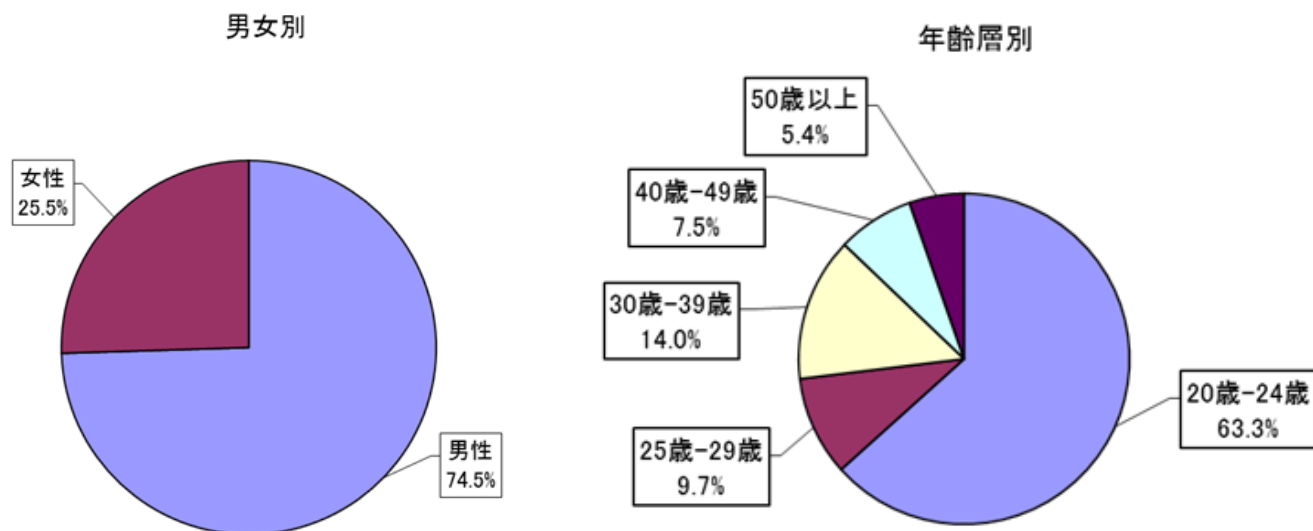
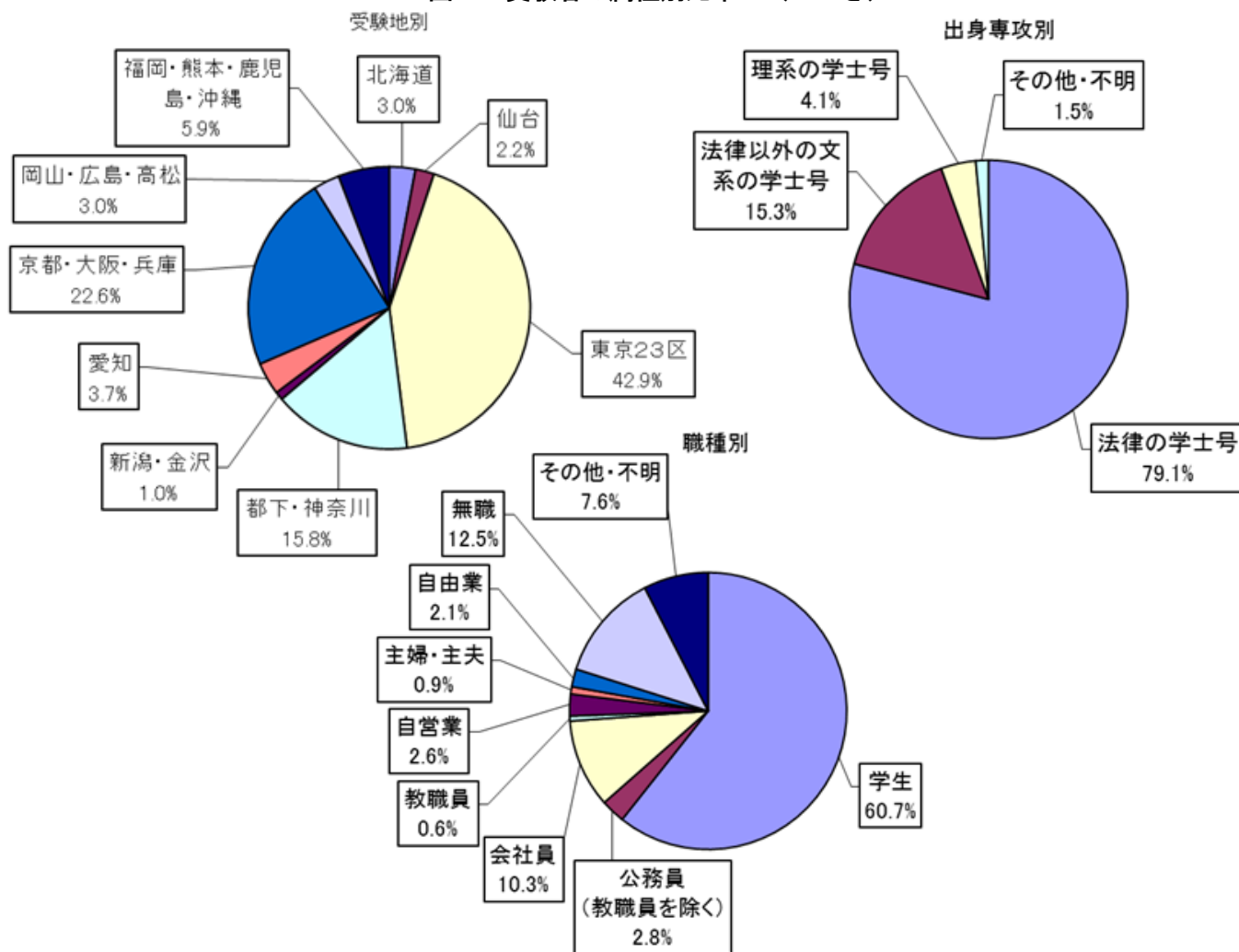


図3 受験者の属性別比率 (次ページにつづく)

図3 受験者の属性別比率 (つづき)



3.2 スコア (総合得点) の分布

法科大学院全国統一適性試験では、第1部～第3部の成績について、等化手続きを経た300点満点のスコア(総合得点)を受験生に通知している。スコア(総合得点)の平均は191.6、標準偏差は38.3であった。スコア(総合得点)の分布は図4、表2のとおりである。

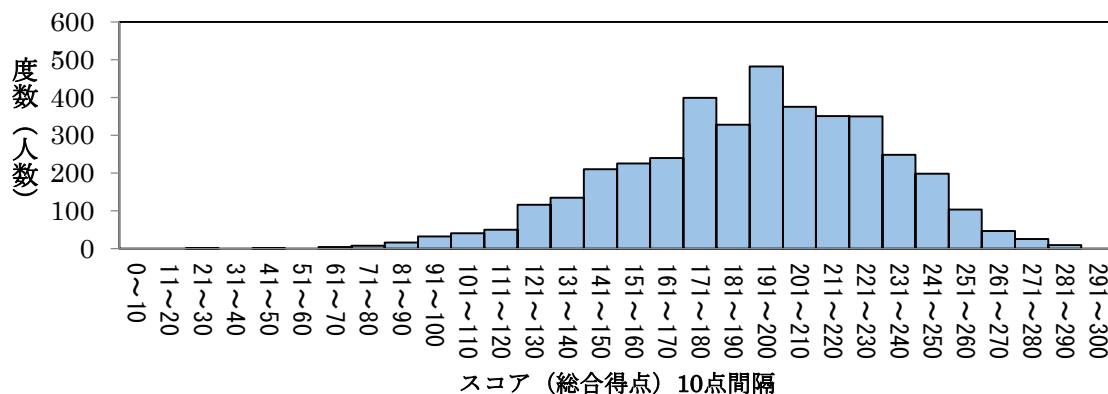


図4 スコア (総合得点) のヒストグラム

3.3 属性別スコア（総合得点）の分布

スコア（総合得点）の属性ごとの分布を、箱ひげ図として、図5に示す。図において、箱のなかの横棒が中央値の位置、その上下の箱にそれぞれ対応する部分に全体の25%ずつの受験生が含まれる。したがって箱全体に対応する部分には全体の50%の受験生が含まれていることになる。箱の上下の辺より伸びている直線（ひげ）に相当する部分には上位・下位の概ね25%ずつの受験生が分布している。この直線の長さは箱全体の長さの1.5倍までであり、その範囲外にある受験生の得点位置は、○印で示されている。

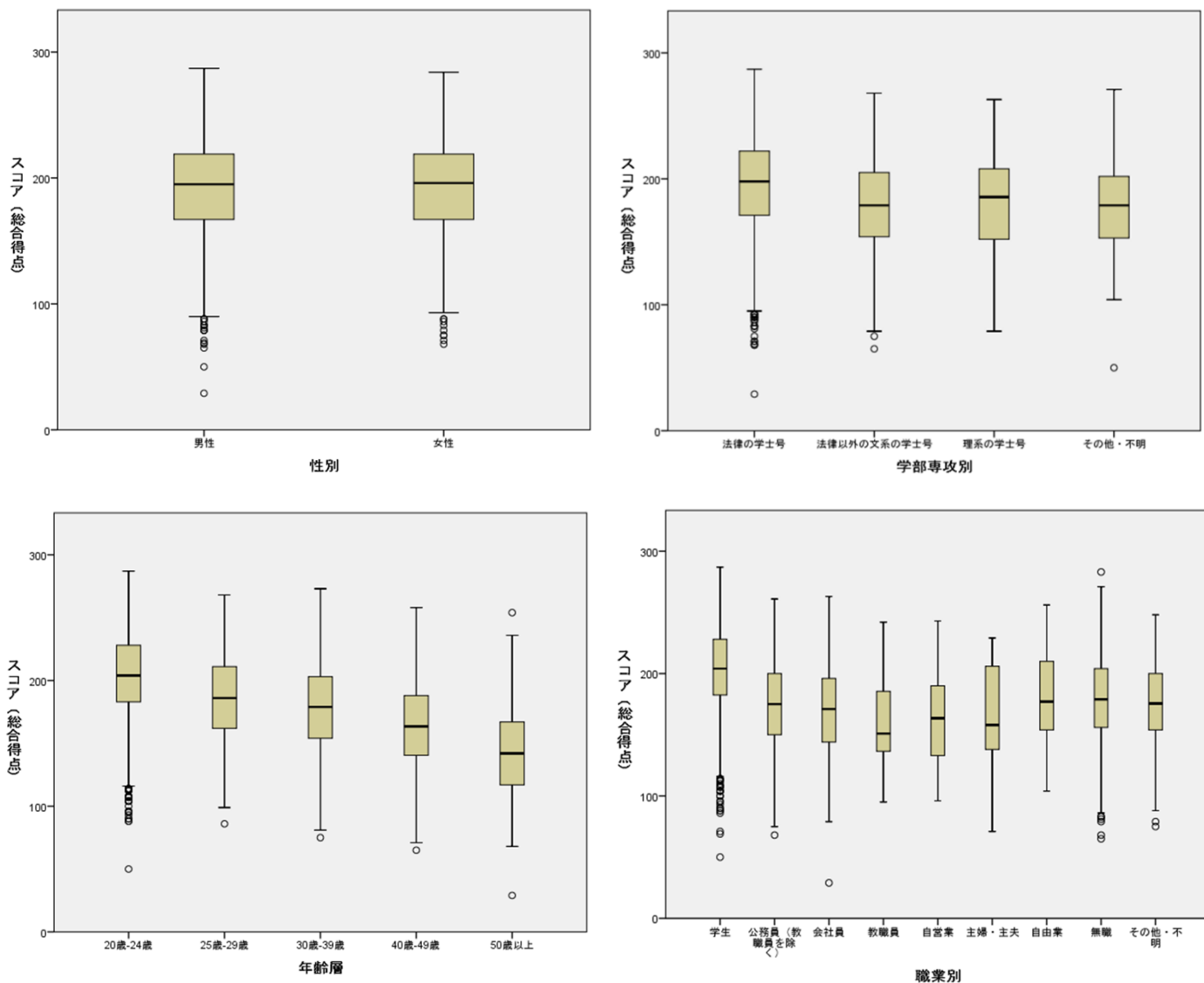


図5 スコア（総合得点）の属性別箱ひげ図

3.4 等化について

等化 (equating) とは、あるテストにおいて、問題項目が異なる複数の版の得点を相互に比較できるようにする統計的操作のことである。等化により、テストの複数の版の結果が共通尺度上の得点で表現される。ただし、比較するテストは同一仕様 (same specification) でなければならない。同一仕様とは、測定する能力、問題の種類、問題の形式、テスト時間などが等しくなるように設計されていることを指す。

法科大学院全国統一適性試験は、第1回試験および第2回試験の等化を前提とした同一仕様で設計されている。問題作成の段階で2回の試験の間で難易度が異ならないように細心の注意をはらっているが、問題の内容が異なっている2回の試験を完全に難易度の等しい試験にすることは不可能である。また、いずれかの回のみ受験することが可能なため、各回の受験者集団も異なる。そのため、偏差値などを用いてそれぞれの回ごとに標準化した得点どうしを比較することは適切ではない(これはどのような試験についても一般にいえることである)。そこで等化手続きをとることで、上記のような比較ができるようにするのである。

得点を等化する方法は複数あるが、法科大学院全国統一適性試験の場合、2回とも受験した共通受験者の情報を用いた「等パーセンタイル法」と呼ばれる等化法を利用している。等化手続きを経た結果、第1回の「スコア(総合得点)」と第2回の「スコア(総合得点)」が直接比較できるようになる。2回とも受験した場合には、そのうち高い方の「スコア(総合得点)」を法科大学院が利用することになる。

この手法の詳細については佐藤・柴山(2011)「下位テストから構成されるテスト間の等化におけるブートストラップ法を援用した等化の標準誤差の評価」日本テスト学会, Vol.7, No.1, 85-98 を参照されたい。

4. 合計正答数の分布と信頼性

4.1 第1回試験の結果

2014年第1回法科大学院全国統一適性試験では、論理的判断力を測る問題24項目、分析的判断力を測る問題24項目、長文読解力を測る問題24項目の計72項目が出題された。表1にあるように、第1回試験の有資格受験者数は3,278人であった。表3、表4の資料は有資格受験者数3,278人をベースとしている。なお、テストの測定精度を表す指標である信頼性係数の推定値（クロンバックの α ）は0.829であった。

表3 正答数の分布——第1回

第1回	平均点	標準偏差	最小	最大
第1部	15.6	3.72	0	24
第2部	14.3	3.74	0	24
第3部	13.7	3.43	0	24
合計正答数	43.6	8.99	0	68

表4 合計正答数度数分布（1点刻み）——第1回

得点	人数	累積人数	人数%	累積%	得点	人数	累積人数	人数%	累積%
68	2	2	0.1	0.1	33	74	2,909	2.3	88.8
67	3	5	0.1	0.2	32	55	2,964	1.7	90.4
66	2	7	0.1	0.2	31	72	3,036	2.2	92.6
65	1	8	0.0	0.2	30	39	3,075	1.2	93.8
64	10	18	0.3	0.5	29	43	3,118	1.3	95.1
63	10	28	0.3	0.9	28	25	3,143	0.8	95.9
62	14	42	0.4	1.3	27	22	3,165	0.7	96.6
61	18	60	0.5	1.8	26	25	3,190	0.8	97.3
60	36	96	1.1	2.9	25	13	3,203	0.4	97.7
59	44	140	1.3	4.3	24	16	3,219	0.5	98.2
58	46	186	1.4	5.7	23	12	3,231	0.4	98.6
57	56	242	1.7	7.4	22	9	3,240	0.3	98.9
56	57	299	1.7	9.1	21	11	3,251	0.3	99.2
55	73	372	2.2	11.4	20	6	3,257	0.2	99.4
54	78	450	2.4	13.7	19	5	3,262	0.2	99.5
53	94	544	2.9	16.6	18	3	3,265	0.1	99.6
52	111	655	3.4	20.0	17	3	3,268	0.1	99.7
51	105	760	3.2	23.2	16	2	3,270	0.1	99.8
50	110	870	3.4	26.5	15	2	3,272	0.1	99.8
49	117	987	3.6	30.1	14	5	3,277	0.2	100.0
48	136	1,123	4.2	34.3	13	0	3,277	0.0	100.0
47	150	1,273	4.6	38.8	12	0	3,277	0.0	100.0
46	136	1,409	4.2	43.0	11	0	3,277	0.0	100.0
45	161	1,570	4.9	47.9	10	0	3,277	0.0	100.0
44	128	1,698	3.9	51.8	9	0	3,277	0.0	100.0
43	139	1,837	4.2	56.1	8	0	3,277	0.0	100.0
42	156	1,993	4.8	60.8	7	0	3,277	0.0	100.0
41	139	2,132	4.2	65.1	6	0	3,277	0.0	100.0
40	126	2,258	3.8	68.9	5	0	3,277	0.0	100.0
39	94	2,352	2.9	71.8	4	0	3,277	0.0	100.0
38	114	2,466	3.5	75.3	3	0	3,277	0.0	100.0
37	110	2,576	3.4	78.6	2	0	3,277	0.0	100.0
36	104	2,680	3.2	81.8	1	0	3,277	0.0	100.0
35	87	2,767	2.7	84.4	0	0	3,277	0.0	100.0
34	68	2,835	2.1	86.5	0	1	3,278	0.0	100.0

4.2 第2回試験の結果

2014年第2回法科大学院全国統一適性試験では、論理的判断力を測る問題24項目、分析的判断力を測る問題24項目、長文読解力を測る問題24項目の計72項目が出題された。表1にあるように、有資格受験者数は3,578人であった。表5、表6の資料は有資格受験者数3,578人をベースとしている。なお、テストの測定精度を表す指標である信頼性係数の推定値(クロンバックの α)は0.840であった。

表5 正答数の分布——第2回

第2回	平均点	標準偏差	最小	最大
第1部	15.8	3.60	3	24
第2部	14.2	3.92	2	24
第3部	14.4	3.54	1	24
合計正答数	44.4	9.24	7	69

表6 合計正答数度数分布(1点刻み)——第2回

得点	人数	累積人数	人数%	累積%	得点	人数	累積人数	人数%	累積%
69	2	2	0.1	0.1	37	122	2,873	3.4	80.3
68	1	3	0.0	0.1	36	84	2,957	2.3	82.6
67	4	7	0.1	0.2	35	70	3,027	2.0	84.6
66	5	12	0.1	0.3	34	93	3,120	2.6	87.2
65	10	22	0.3	0.6	33	72	3,192	2.0	89.2
64	10	32	0.3	0.9	32	63	3,255	1.8	91.0
63	18	50	0.5	1.4	31	58	3,313	1.6	92.6
62	19	69	0.5	1.9	30	46	3,359	1.3	93.9
61	27	96	0.8	2.7	29	34	3,393	1.0	94.8
60	42	138	1.2	3.9	28	31	3,424	0.9	95.7
59	52	190	1.5	5.3	27	32	3,456	0.9	96.6
58	64	254	1.8	7.1	26	27	3,483	0.8	97.3
57	70	324	2.0	9.1	25	21	3,504	0.6	97.9
56	91	415	2.5	11.6	24	10	3,514	0.3	98.2
55	86	501	2.4	14.0	23	21	3,535	0.6	98.8
54	95	596	2.7	16.7	22	7	3,542	0.2	99.0
53	118	714	3.3	20.0	21	10	3,552	0.3	99.3
52	116	830	3.2	23.2	20	7	3,559	0.2	99.5
51	117	947	3.3	26.5	19	10	3,569	0.3	99.7
50	148	1,095	4.1	30.6	18	4	3,573	0.1	99.9
49	144	1,239	4.0	34.6	17	2	3,575	0.1	99.9
48	161	1,400	4.5	39.1	16	1	3,576	0.0	99.9
47	145	1,545	4.1	43.2	15	0	3,576	0.0	99.9
46	166	1,711	4.6	47.8	14	0	3,576	0.0	99.9
45	143	1,854	4.0	51.8	13	0	3,576	0.0	99.9
44	151	2,005	4.2	56.0	12	1	3,577	0.0	100.0
43	131	2,136	3.7	59.7	11	0	3,577	0.0	100.0
42	150	2,286	4.2	63.9	10	0	3,577	0.0	100.0
41	128	2,414	3.6	67.5	9	0	3,577	0.0	100.0
40	116	2,530	3.2	70.7	8	0	3,577	0.0	100.0
39	102	2,632	2.9	73.6	7	1	3,578	0.0	100.0
38	119	2,751	3.3	76.9					

5. セクション別の結果

5.1 第1回試験の結果

5.1.1 セクション別の正答数分布

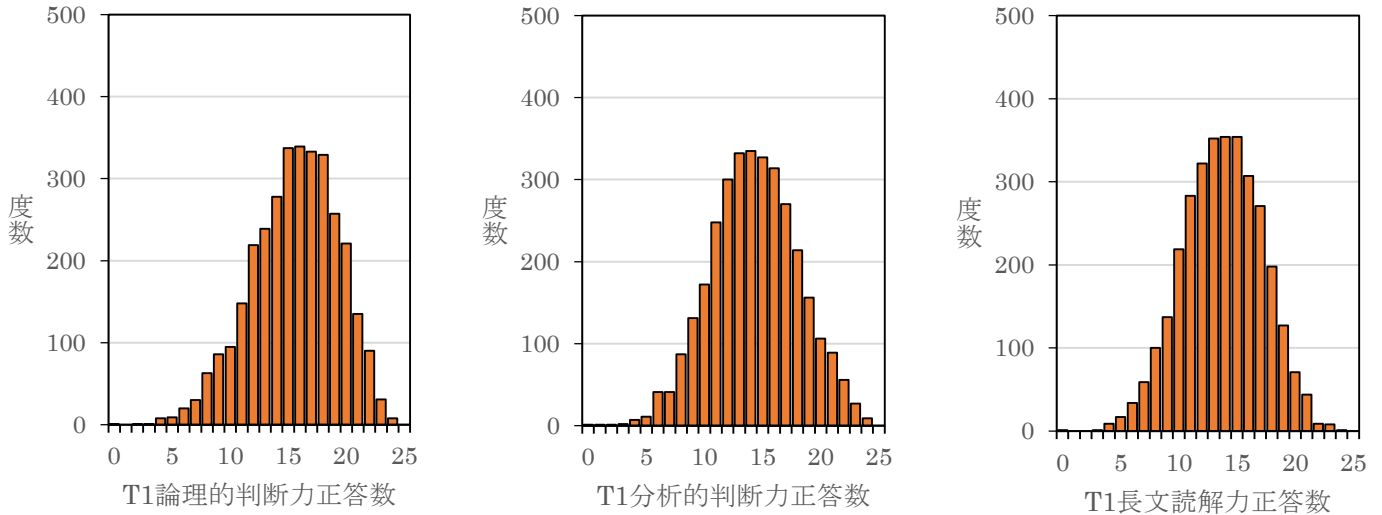


図6 セクション別の正答数ヒストグラム——第1回

5.1.2 セクション別の通過率と項目識別力

図7に第1回試験の古典的テスト理論に基づく各セクションの項目分析の結果を示す。横軸の通過率は、各項目における正答率に相当し、各項目のむずかしさを表す指標である。通過率が小さい項目ほどむずかしい項目であり、通過率が大きい項目ほどやさしい項目である。縦軸の項目識別力は、測定しようとする能力を捉える上で、当該項目がどの程度有効かを表す指標である。識別力が高い項目は、能力の高い人(当該セクションで高得点の人)ほど正答し、低い人ほど誤答していることを示す。

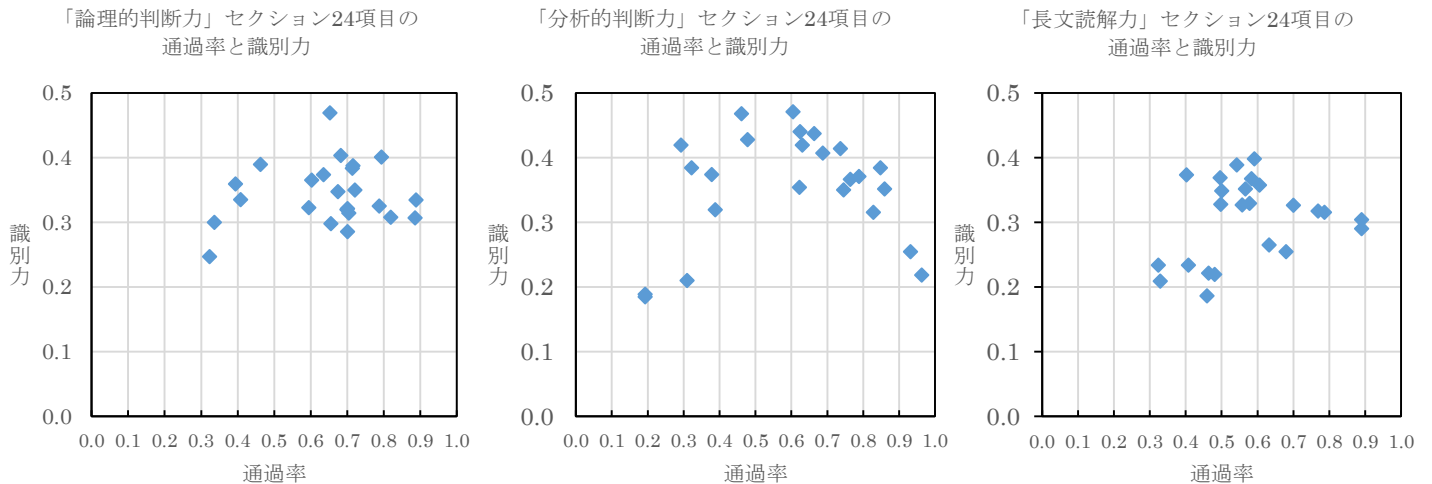


図7 セクション別の通過率と項目識別力——第1回

5.2 第2回試験の結果

5.2.1 セクション別の正答数分布

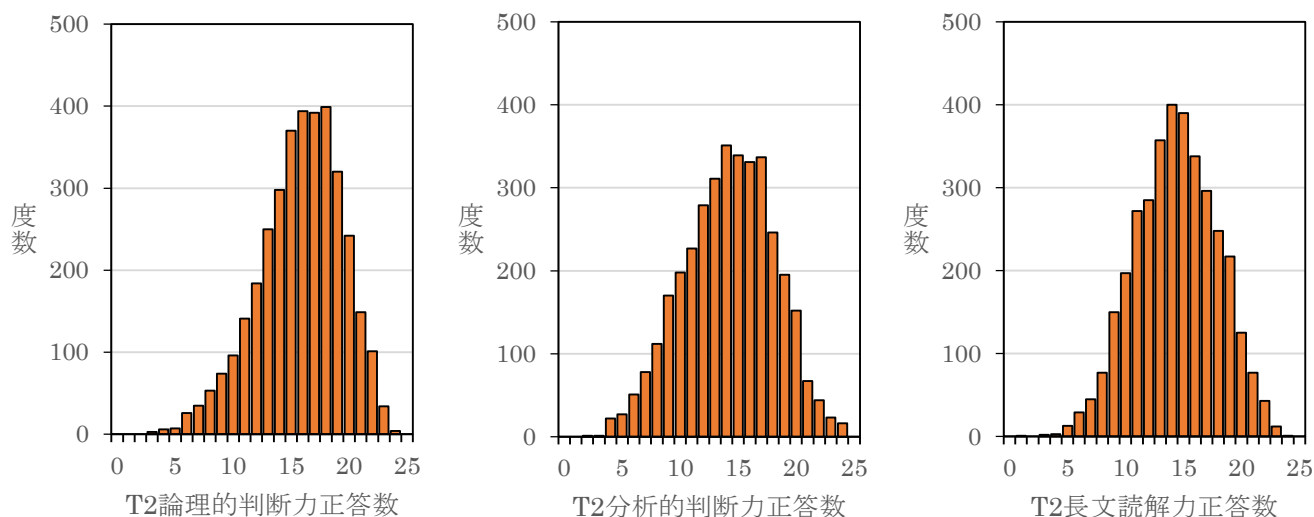


図8 セクション別の正答数ヒストグラム —— 第2回

5.2.2 セクション別の通過率と項目識別力

図9に第2回試験の古典的テスト理論に基づく各セクションの項目分析の結果を示す。図の見方については5.1.2を参照のこと。

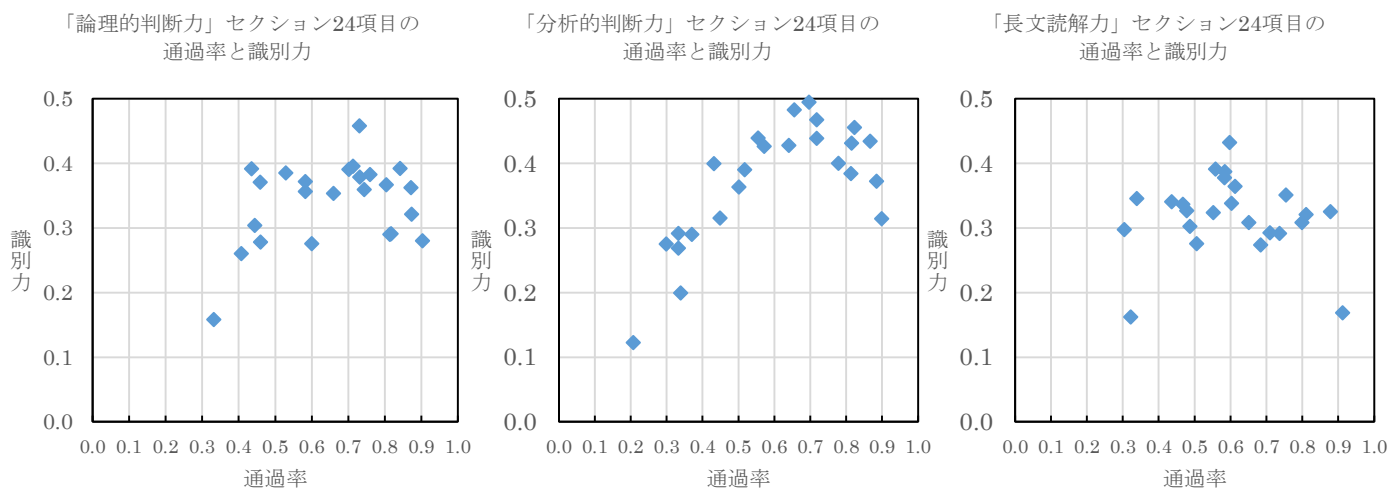


図9 セクション別の通過率と項目識別力 —— 第2回

6. セクション間の相関関係

第1回試験、第2回試験それぞれの相関係数、共分散比は表7、表8のとおりである。セクション間の相関係数により、法科大学院全国統一適性試験が測定する適性の構造をみることができる。共分散比とは、ある部分の得点のばらつきが得点全体のばらつきのうちのどれくらいを占めるものであるかを表す指標であり、共分散比の値が大きいセクションほど、総合得点のばらつきへの寄与が大きいセクションとみなされる。

表7 セクション間の相関係数と共分散比——第1回

	論理的判断力	分析的判断力	長文読解力	総合得点
論理的判断力	1.000	0.547	0.575	0.860
分析的判断力	0.547	1.000	0.448	0.813
長文読解力	0.575	0.448	1.000	0.805
総合得点	0.860	0.813	0.805	1.000
共分散比	0.355	0.338	0.307	1.000

表8 セクション間の相関係数と共分散比——第2回

	論理的判断力	分析的判断力	長文読解力	総合得点
論理的判断力	1.000	0.568	0.583	0.854
分析的判断力	0.568	1.000	0.487	0.833
長文読解力	0.583	0.487	1.000	0.817
総合得点	0.854	0.833	0.817	1.000
共分散比	0.333	0.354	0.313	1.000

7. 第4部「表現力を測る問題」について

第1回試験、第2回試験ともに「表現力を測る問題」はいわゆる論述式の試験として実施された。採点およびその結果の利用は各法科大学院に委ねられたが、適性試験管理委員会では、法科大学院向けの説明会において、採点のための「採点基準」および採点のモデルケースを提示している。